

✠ 《連載》人とことば ✠

堀川潭 (1953) 「第三交響曲」とドナルド・キーン

—元米海軍訊問官と元捕虜の交流における葛藤と超克—



河路由佳

1. はじめに

堀川潭 (本名：高橋義樹, 1917—1979) が1953年12月に発表した小説「第三交響曲」は、戦争中のハワイの捕虜収容所に於けるドナルド・キーン (1922— ) との交流の事実に基づく作品である。米国海軍情報部員と日本人捕虜として出会った二人は、戦後も交流し、友情を温めた。

堀川の遺族のもとに、ドナルド・キーンからの書簡が保管されている。本稿ではこれらの書簡と堀川の作品等を通して、二人の交流の軌跡を辿る。戦場で敵対する訊問官と捕虜という立場で出会った二人はどのような友情を築いていたのか。本稿では、資料を通して、戦場で敵味方として出会った二人の葛藤とその超克について考える。

2. 堀川潭とドナルド・キーンの出会

堀川潭こと高橋義樹は、1917年に島根で生まれた。日本大学芸術科で伊藤整に文学を学び、同盟通信社の記者となったが、その傍ら1943年より堀川潭の筆名で小説を発表し始める。1944年3月に海軍報道班員としてサイパン島に送られ、5月にグアム島に移ったところ米軍上陸に遭い、ジャングルを約3か月放浪した後、10月14日に米軍の捕虜となった。衰弱きっていた堀川は、ここで九死に一生を得た。11月下旬にハワイの捕虜収容所に移送されるが、そこで彼の訊問を担当したのが、海軍日本語学校で日本語を習得したドナルド・キーンであった。堀川への訊問は12月の初旬から2週間に渡って行われた。

3. 堀川潭 (1953) 「第三交響曲」

堀川潭の短篇「第三交響曲」は、『文学生活』第12号 (1953年11月) に、

戦争体験に基づく連作の一つとして発表された。作品の中でドナルド・キーンをモデルにした新聞官の名は「ロナルド・コーン」、作者をモデルにした主人公の名は「田崎」とされている。粗筋は、次のとおりである。

グアムの戦場で生死の境をさまよった挙句、1944年11月末に捕虜としてハワイの収容所に送られた田崎は、米海軍のロナルド・コーンという若き将校から2週間ほど新聞を受けた。文学好きで思想傾向にも共通点のある二人には「深い相互理解」が生まれた。

最後にコーンは「グアム島で日本軍は米兵を殺したか」と訊ねた。田崎は2名の米兵捕虜が殺害されたのを知っていたが、黙っていた。後日、その殺害現場の写真がライフ誌に掲載された。田崎はコーンが自分の嘘を咎めるのではないかと思った。

しかし、その十日余り後に再会したコーンは明るい顔で、レコード鑑賞会を開くから来るようにと言う。レコード鑑賞会の日、田崎はじめ50名近い捕虜が集まる中、コーンがレコードと蓄音機を運び込み、日本の流行歌を数枚かけた後、ベートーヴェンの交響曲第三番「英雄」をかけた。一座は鎮まり感動に包まれた。コーンがこの曲を捕虜に聴かせた意図を田崎は詮索するが、一心に音楽を聴くコーンの姿を見て、そこに他意のないことを理解した。

#### 4. モデルとなったハワイ捕虜収容所でのレコード鑑賞会

「第三交響曲」に描かれたレコード鑑賞会については、キーン (2011・2014) が、その事実を記している。これによると、この鑑賞会は、ある捕虜の「英雄交響曲が聴きたい」という要望に応えて、キーンが個人的判断で行ったものである。鑑賞会は大成功で、キーンは捕虜たちと共に深い感動に浸った。この鑑賞会については、収容所の所長であったオates・ケーリーも書いている (ケーリー 1976, p.78)。ケーリーはこの鑑賞会を「進歩的分子」の学習活動と位置づけているが、記された事実はキーン (2011・2014) とほぼ一致する。ケーリーは「ベートーヴェンの〈皇帝〉」を聴かせたと書くが、ここは〈英雄〉の記憶違いだと思われる。この鑑賞会の感動を、ケーリーは「安逸な生活ではわからない音楽が、鉄柵の中でこそわかるのだ」と述べている。それぞれが

一致して記すのは、戦場でこそ経験できた奇跡のような感動であった。

#### 5. ドナルド・キーン (1946) 「エロイカ・シンフォニー」

1946年、海軍を除隊してコロンビア大学の大学院生になったキーンは、この鑑賞会の感動を「エロイカ・シンフォニー (英雄交響曲)」と題するエッセイに書いた。長く未発表であったが、キーン・小池 (2011) にその日本語訳が掲載された。ラジオから流れるこの曲を聴いて、2年前の捕虜収容所を思い出したという書き出しで始まるそのエッセイの内容は以下の通りである。

「我々」は捕虜に「生きる意義」を説いていたが、ある日佐藤という博学の元海軍士官が「エロイカ・シンフォニー」を聴きたいということで、シャワールームに蓄音機とレコードを持ちこみ鑑賞会を開いた。佐藤ら約30名の捕虜が集まった。鑑賞会で「私」は敵味方の心が一つになるのを感じ、「偉大な音楽が持つ普遍性 (p.199)」に打たれた。

キーン・小池 (2011) には、これを50年後に読み直したキーンによる感想が付記されている。それによると実際には「佐藤」は鑑賞会に出席していなかった。キーンの「佐藤」への誠意は空振りだったのである。キーンはこの部分を脚色し、戦場での美談に整えたようである。

#### 6. 堀川潭「第三交響曲」に描かれたドナルド・キーン像

堀川潭「第三交響曲」では、ドナルド・キーンをモデルとする若き新聞官「ロナルド・コーン」が、以下のような人物として描かれている。

- ・米海軍所轄の日本語学校を一番の成績で卒業した秀才で、日本語は、スピーキング、ライティングともに達者だった。
- ・初日から「私」に親近感をもって接したが、態度は丁重であった。





・訊問は、複雑で多岐にわたった。学歴や職歴、捕虜になった経緯に始まり、思想的傾向、戦時下日本の国内事情、日本の敗北した場合の戦後処理問題、天皇制存続問題などの質問を、執拗に浴びせかけてきた。

そのような状況で、コーンと長時間にわたって話し合った二人の関係については、次のように書かれている。

・「私」は「コーン」の訊問からアメリカの戦後日本への意図を探知し、自身の生き方の指針を得たいと思い、訊問には終始、真面目に応答した。

・時に「私」は「コーン」と、日米両国の進歩的知識人が肝胆相照らして語り合っているような錯覚を起こし、口角泡を飛ばして語り合った。

最後にコーンは「質問はこれですっかり終わりました。長い間有難う御座いました」と言って名刺<sup>□</sup>を渡す。「私」はコーンに自宅住所を書いてもらう。そして、二人はこのあととも連絡を取り合う約束をした。

## 7. 発表直後のドナルド・キーンからの書簡に書かれた落胆

戦後、二人はそれぞれ故国に帰った。そして、小説に書かれた約束通り連絡をとりあっていったようである。堀川はキーンに「第三交響曲」の掲載誌を送り、これを読んだキーンは、1954年2月22日付の書簡を堀川に送った。

キーンの手紙は、この小説を「反米主義の流行の現在ではこんな心温める話にめったにありません」と讃えつつ、自らをモデルとしたコーンの描写について「落胆しました」と書き、その思いを切々と綴るものである。特に、グアムでの日本兵による米兵殺害を黙っていたことについて、「コーン」が不気味な薄笑いを浮かべて「あなたはそうそきです」とにじり寄りような幻影を見た<sup>△</sup>と書かれていることについて、キーンは次のように書いている。

御小説の中のグアム島の捕虜についての話しは本當に悲惨なものです。<sup>(マヤ)</sup>  
 [...] が、私の「不気味な薄笑ひ」は安心させる笑ひではなかったかと思ひます。[...] 私の友情が変らないと云ひたかつたので笑ひました。そして貴君の返事を信じました。

また、レコード鑑賞会の意図について「私」が詮索する部分については、「私の動機は純粋で[...]、私が蓄音機やレコードを持って来たのは友達を喜ばせる為でした」と書く。そして、書簡の最後に、次のように書いている。

貴方が私の誠意を疑ったことを残念に思ひます。私は若くて経験が乏しかったので色々な馬鹿なことを云ったのでせうが、高橋さんを利用したこともないし、騙したこともないのです。

そうして、キーンは、日本には友人も多いので、単行本にするときには、名前を完全に変えてもらいたいと頼んでいる。戦場での友情を信じていたキーンが、深く傷ついた様子が読み取れる。

## 8. 堀川潭とドナルド・キーンの再会 (1954年4月1日)

この悲痛な「落胆」と嘆願は、その後、どうなったのだろうか。堀川潭(1980)によると、彼とキーンはこの書簡から間もない1954年4月1日、銀座で開かれた日本ペンクラブの例会で、戦後初めての再会を果たした。

堀川は文芸記者として取材に行き、サイデンスツーカーに案内されて出席していたキーンに出会ったのである。キーンは当時、京都大学の大学院生であった。堀川(1980)は「キーンと視線が会った途端、私は握手を求めて再会の喜びを分かち合った」

と書いている。この時、堀川はキーンに伊藤整を紹介し、キーンと伊藤はたちまち意気投合した。会が果てて、伊藤、堀川らはキーンを誘って、銀座で二次会、新宿で三次会と遅くまで語り合い、

この記念すべき顔ぶれを写真に残そうと写真家に

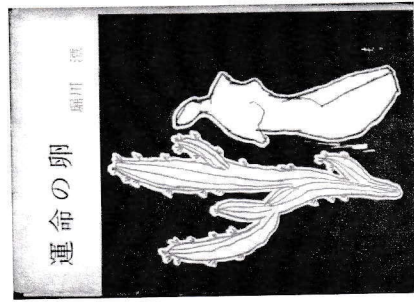


写真1 堀川潭(左から2人目)とドナルド・キーン(左から3人目)の再会の日(1954年4月1日)の写真。左から5人目は伊藤整。(堀川潭『伊藤整氏の三十年』口絵)



撮影してもらった。(写真1)。

## 9. 堀川潭 (1957) 『運命の卵』へのキーンの書簡に書かれた内省



「第三交響曲」は、戦争体験に基づく他の11編と合わせて『運命の卵』に収められ、1957年10月20日を発行日として藝文書院より刊行された。「第三交響曲」の本文に異同はなく、キーンの書簡にあった頼みは容れられていないが、巻末に、「作者が捕虜としてハワイにあった当時、交わりのあった情報将校ドナルド・キーン氏から受けた訊問にヒントを得て執筆したもののだが、登場人物ロナルド・コーンは作者の創造上の人物であり、ドナルド・キーン氏とは無関係であることをお断りしておきます。」という「附記」がある。

出版に先だって、堀川はキーンにデラ刷りを送った。キーンは1957年10月1日付で堀川に「實に感慨無量でした。」に始まる書簡を送った。「第三交響曲」については、以下のように書いている。

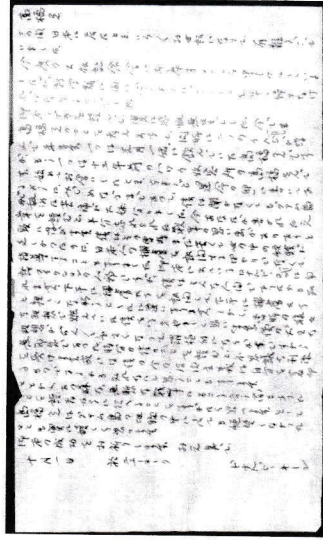
僕はその當時まだ若くて世の中の経験が乏しかったのに、日本人の捕虜を訊問するばかりでなくて指導することもありました。御本にでていゝるロナルド・コーンは勿論フィクションの人物ですが、僕はそんな人間であつたかも知れません。[...]ともかく、あの嫌な無慙な戦争にもこう云う面もあつたことを讀者に伝えることをありがたく思います。

戦後9年ぶりの再会で、お互いの誠意を確認し、信頼を回復することができたのだろう。「ロナルド・コーン」についても、合意が得られたものと思われる。この書簡で、キーンはロナルド・コーンに自らを重ね、改めて、捕虜の目から見た訊問官としての自分を見つめ直したようである。その上で、この作品の価値を再評価している。「御本の成功をお祈りします。お元気で。」に終わるこの書簡(写真2)は、全文が『文学生活』第40号(1958年3月)

73ページに掲載された。

『運命の卵』が出版されると、堀川はキーンに送った。1957年12月14日付のキーンからの札状がある。「御書簡も『運命の卵』も頂きまして、ありがとうございます。御本を読みながら昔の思い出が浮んで来て感激しました。本の出来栄もなかなか綺麗です。おめでとう!!!とある。数年前の心の傷は癒されたようである。その後、二人の友情は揺るがぬものとなった。

写真2 1957年10月1日付 堀川潭『運命の卵』出版に際してドナルド・キーン氏より送られた書簡



## 10. 堀川潭 (1961) 「真珠湾・終戦前後」に描かれたドナルド・キーン

『運命の卵』から4年後、堀川潭は再びドナルド・キーンとの思い出に基づく小説「真珠湾・終戦前後」を書いた。ここでは、ドナルド・キーンに当たる人物は「ダグラス・レーン」、そして自らに当たたる主人公は「田木」と名付けられている。二人の、文学を愛する者同士の交流が印象的である。

「あなたは文学者であると聞いています」とレーンは言う。日本兵が無残に死んでゆく戦場にあつて、「文学は人間のため、人間の生命のためのものではないでしょうか。その生命が、沢山の生命が失われかけている。それでもないでは黙っていいのでしょうか」と詰め寄るように言われて、田木は、日本兵に投降を促すテープの録音やビラの作成をする役目を受け入れる。それから間もなく、ハワイの1945年8月8日のラジオで日本がポツダム宣言を受諾するとの報道がなされると、火花が上がり砲声が響き、辺りは祝賀ムードに包まれた。田木は、この現実を受容してはいたはずなのに敗北感と屈辱感に苛まれる。それでも、最後の仕事として、日本向けの放送の録音をする。

「日本の皆さん、[...]悲しいことに祖国は戦いに敗れました。[...]しかし、皆さん。安心して下さい。アメリカ人は決して鬼ではありません。」と。

この作品を1961年に改めて書いたのは、キーンとの友情を通して、堀川が



自らを振り返って得た苦悩の末の自己肯定だったのではなからうか。

### 11. 五十年後のドナルド・キーンが語る「第三交響曲」

それから半世紀余りが過ぎ、キーン・小池（2011）の中で、キーンは堀川潭「第三交響曲」について、次のように説明している。

その時、出席していた捕虜の一人は高橋義樹という人で、伊藤整の弟子でした。[...] 戦後になってから、彼はあの晩の出来事、つまりレコードを聴いた夜のことを書きました。どうして私がベートーヴェンを聴かせたかと。ベートーヴェンが自由主義者であったからなのか。ナポレオンを嫌ったからか、日本人に西洋的思想を植え付けたいからかなどと、色々考察した末、ただ単に私や捕虜がそれを聴きたかっただけと結論付けた、そんな素晴らしい短篇を残しています。（55 ページ）

ここにおいて、キーンは、作品中の「コーン」を自分に重ねつつ、堀川が詮索したのは無理もないことで、それが当時の捕虜の心理の真実であったことを、深い理解をもって受け止めている。

### 12. 堀川とキーンはそれぞれの葛藤をどう超克したか

堀川の作品には、捕虜としての葛藤と超克が書き込まれている。捕虜である堀川にとって、訊問官は祖国と戦う米軍そのものでもある。キーンに友情を感じたとしても、彼の言動は自らの命運にかかわるので、注意深く観察し、その意図を詮索しないわけにはいかない。「第三交響曲」に書かれた日本軍の米兵殺害のエピソードは、その緊張感を伝えて効果的である。日本兵への投降呼びかけは祖国を裏切るものではあるが、これ以上同胞を死なせないという思いは本心からのもので、その方法として米軍に協力したことを、自らに言い聞かせなければならなかった。そんな葛藤の中にあつて、レコード鑑賞会のキーンの姿は、人間への信頼を取り戻すものであった。

一方、米国海軍情報部員のキーンの側にも「収容所の管理責任者」の一人が、収容者に対して好意を示したことが明らかにすれば、不愉快に思ふ向きもある

ろう（キーン・小池 2011, p.192）」と書かなければならないような事情はあったが、捕虜との立場の差は歴然としており、生命の危機に晒された堀川の小説にあるひりひりするような緊張感は、キーンのエッセイには認められない。両者の間には計り知れない距離があったというべきであろう。

その距離をキーンが理解するには、1954年2月22日付の読後のキーンからの書簡にあつたような「落胆」を経験しなければならなかった。当時の堀川のおかれた状況は、キーンの想像以上に苛酷なものであったのである。

二人は収容所で連絡先を交わし、戦後も交流を続けた。共に文学を愛好し仕事とすることで再会を果たした意味は大きい。また、堀川の「第三交響曲」という作品の力は大きかった。この作品の眼目は、葛藤を超えてなお、キーンの鑑賞会の目的は捕虜と共に音楽を鑑賞する以外の何物でもなかったことを理解したという結末にある。それは、キーンの思いが、確かに通じていたことを意味していた。

### 13. おわりに

こうして迎えてくると、二人の間に友情が生まれる決め手は、ドナルド・キーンが初めから捕虜を信じて接したことにあることが確認される。それでは、キーンはどうして戦場で敵国の捕虜にかくも好意的に接することができたのだろうか。キーンは、「海軍日本語学校の卒業生で日本や日本人が嫌いな人は一人もいません。[...] 卒業後、わたしたちはハワイの戦地に赴きましたが、日本人捕虜とは、みんなすぐ友だちになりました。（キーン・河路 2014, p.52）」と語っている。そしてその理由を次のように説明している。

…なぜかと考えてみますと、わたしが初めて出会った日本人が、わたしの尊敬する角田柳作先生だったことに思い当たります。そのあと、海軍日本語学校でお世話になった先生の中にも日系人の先生が大勢いました。どの先生もいい人で、わたしたちと非常に仲がよかったのです。ですから、わたしは最初から日本人が好きでした。戦場であつたとしても、わたしは日本人に会うことを嬉しく思っていました。（キーン・河路 2014, pp.145-146）

教室で初めて出会う外国人教師と生徒の信頼の力は、想像以上に大きいのかもしれない。

(東京外国語大学教授 博士〈学術〉)

【謝辞】堀川潭氏夫人の高橋幸子氏、長女の高橋美加子氏には、ドナルド・キーン氏から送られた書簡をはじめ資料のいろいろを閲覧させていただき、お話を聞かせていただきました。ドナルド・キーン氏にはこの書簡の草稿への使用を快くお許しくださいました。心より御礼申し上げます。

# ●注●

- 【1】 作品の中では、このときコーンの名刺には「今呂納」と書かれていた。堀川 (1980) には事実として、同じ場面について書かれているが、それによると、コーンの名刺には「鬼怒鳴門」「金唐納」と刷られていた。「鬼怒鳴門」は、現在キーン氏が用いている漢字表記であるが、これが戦争中から使われていたことが分かる。ちなみに三島由紀夫 (2001) のキーン宛の書簡で、三島は自らの名を「魅死魔幽鬼尾」と書き、コーンの名を「怒鳴門鬼韻」と書いている。影響関係は不明だが、感性の重なりが興味深い。
- 【2】 原作では、この時、コーンは「鋭いまなざしに人を疑る時に放つあの瞳さがさしたようでもあった」と描写されており、「不気味な薄笑い」は、その後「私」の見た幻影だと書かれている。

# ■参考文献■

- 上村淳一郎 (1976) 『太平洋の生還者』 文藝春秋  
ドナルド・キーン、河路由佳 (2014) 『ドナルド・キーン わたしの日本語修行』 白水社  
ドナルド・キーン、小池政行 (2011) 『戦場のエロイカ・シンフォニー 私が体験した日米戦』 藤原書店  
ドナルド・キーン (2014) 『ドナルド・キーン著作集第十巻 自叙伝決定版』 新潮社  
オーテス・ケリー (1976) 『よこ糸のない日本—天皇と日本人とデモクラシー』 サイマル出版会  
堀川潭 (1953) 『第三交響曲』 『文学生活』 第12号 (1953年11月25日発行) 新文化社、pp.36-47  
堀川潭 (1957) 『運命の卵』 藝文書院  
堀川潭 (1961) 『真珠湾・終戦前後』 『近代文学』 第16巻第1号、近代文学社、pp.105-128  
堀川潭 (1980) 『伊藤整氏との三十年』 新文化社  
三島由紀夫 (2001) 『三島由紀夫未発表書簡 ドナルド・キーン氏宛の97通』 中公文庫